心想

「2001年を国際ボランティア年にしよう」という機運が国連機関や各国のNGO（非政府組織）の間で高まっている。今年2月に国連ボランティア計画が東京で開いた「政策フォーラム」で国連ボランティア名誉大使の中田武仁さん（58）＝東大阪市在住＝が提唱したのがきっかけだ。国連ボランティアとしてカンボジアで選挙監視活動中に長男の厚仁さん（当時25歳）が射殺されて3年。息子の遺志を継いで国際ボランティアの支援活動を続ける中田さんに提案実現への期待などを聞いた。

【高村　洋一】

国連ボランティア名誉大使

中田武仁さんに聞く

国益超えた貢献こそ

財政援助はトップでも…

日本人わずか2％

国連ボランティア専門家は現在、約130カ国で約2100人。うち、日本人は18カ国に36人で全体の2％足らず。日本政府は93年から国別では最大の年間250万ドル（約2億7000万円）を国連ボランティア計画に拠出しながら、「財政援助だけでなく、もっとボランティアの参加が増えるように広報に努めてほしいとの要望を受けている。

1993年5月には超党派の衆参両院議員有志が「国際ボランティア支援対策推進議員連盟」を結成。国際ボランティア休業奨励法案の骨子を作成したが、法制化への動きはない。

中田厚仁さんと同時期にカンボジアで国連ボランティア活動にあたった川崎市の阪口直人さん（32）は勤務先の企業でボランティア休職が認められず、退社して参加した。「国連ボランティアは突然の退任となることが多く、企業の理解が得にくい。安全面でも自分の身は自分で守らなければならないのが実情だが、それでも参加する価値があることを若い人たちに伝えていきたい」と話している。

2001年を

「国際年」に

――「国際ボランティア年」の発案。実現しそうでしょうか。

中田さん　国連ボランティア計画が今月の執行委員会で正式に議題として取り上げました。21世紀には、紛争や飢餓で援助を必要とする国々に、もっと多くの日本人に出かけてほしい。政府も企業もそのための環境づくりに努めていただきたい、という狙いです。9月に始まる国連総会では、日本に提案国になってもらえるようにお願いしています。

――名誉大使としての訪問国は10カ国以上ですね。

中田さん　武力紛争にポランティアが巻き込まれることがないかを確認するために旧ユーゴをはじめ、紛争地帯に優先して出かけています。今年は3月から4月にかけてレバノンとイエメンに行きました。レバノンでは、かつてのパレスチナ紛争で古里を破壊された人々のために「から村づくりを手伝う国連ボランティアたちの活動をつぶさに視察しました。

――厚仁さんの事件で、国連ボランティアの安全確保が問題となりました。

中田さん　幸い、戦闘に巻き込まれて死亡した人はその後いません。ボランティアの現場で緊急の場合の連絡手段があるかどうかを防間ではまず確認するようにしています。ボランティアがマラリアなどにかかることのないように働く場の衛生環境をよくしてもらうことも広い意味での安全確保だと思います。日本政府が、国連ボランティア計画への拠出金の増額に安全対策の強化を要求していることは評価できます。

――厚仁さん殺害の犯人は分かりませんでした。

中田さん　私どもの手で犯人を捜し出す気はありません。新たな憎しみを心に植えつけたくないからです。

――コンポントム州中部の銃撃現場近くに3000人の州民が移り住み、「ナカタアツヒト村」を建設したという手紙が現地から届いたそうですが。

中田さん　住民のみなさんが村の中心に厚仁の記念碑を建ててくださるとのことで少数ですが。

中田さん　休業してボランティアに参加したり、活動を終えた後、安心して元の職場に戻れる環境が日本では不十分です。また、生活にゆとりやお金がなければボランティア活動ができないという固定観念もあるのではないでしょうか。UNTAC（国連暫定統治機構）にかかわったカンボジア人の中からは、ルワンダで人道援助にあたるボランティアが育っています。講演先では、「組織の中に入っているだけではだめ。自分が持っている能力をボランティアの現場でみつけて」と話しています。21世紀に最も期待される国連機関は個人が国益を超えて活動する国連ボランティア計画だと思っています。

国連ボランティア（UNV）計画　1970年に設立された国連機関。ジュネーブに本部を置き、今年ボンに移転する予定。国連機関や受け入れ国が実施するプロジェクトに専門技能を持つ21歳以上の国連ボランティアを派遣している。技術協力、地域開発、人道支援、平和維持活動にあたる。日本での応募、問い合わせ窓口は国連開発計画東京連絡事務所（☎03・5467・4751）。

中田　武仁（なかた・たけひと）氏　1937年、大阪市出身。93年、商社を退職して「中田厚仁記念・国連ボランティア活動支援事務所」を大阪市中央区に設立。同年、世界でただ一人の「国連ボランティア名誉大使」に任命される。中田さんの提唱で設立された「中田厚仁記念基金」（事務局・住友信託銀行本店）は1億6000万円を超え、国際ボランティア活動中の死傷者への弔慰金や家族費助成などに使われている。全国各地での講演は800回以上にのぼる。著書に「息子への手紙」（朝日新聞社）。